

留学を終えて

聖マリア女学院高等学校 別城 未椰（イタリア）

私は昨年9月から今年の7月までイタリアのサルデーニャ島に10か月間の交換留学に行きました。高校に入学する前から留学をしたいという思いがあり、帰国された先輩方の話を聞いて留学に行くことを決めました。私は元々自分の意見や考えに自信がなく、常に周りの意見に流されるだけでした。その根底には周りと言いつ争いをしたくない思いがあったからです。自分の意見を言わないといけない場面では、誰もが共感してくれそうな意見を述べていました。留学をした先輩方の中には私と似たような性格の人もありました。しかし、帰国後のスピーチをしていた先輩は堂々としていて、その変化に強く心を動かされました。

ではなぜ私はイタリアを選んだかについて話します。日本ではピザやパスタ、イタリアの高級ブランド品などが広く知られていますが、それらの背後にある文化的背景や人々の考え方までは、深く理解されていないと感じていました。私はそのような「表面の魅力」のさらに奥にある本質を、自分の目で確かめたいと思いました。

イタリアに到着した一週間後に学校がスタートしました。私は家から徒歩15分の地域の科学学校に通ってました。留学当初は授業の内容を聞き取るだけでも一苦労で、理解するのがとても難しく感じました。そのような状況の中で、クラスメイトが英語でサポートしてくれたり、ホストファミリーと一緒に家で勉強したり、多くの助けを得ながら少しずつ慣れていきました。今でも情報のプログラミングや哲学は難しいですが、どんなに辛くても学校をほとんど休むことなく10月間を終わらせることができてよかったと思います。

とても印象に残っている授業の1つに、環境調査をテーマにした実習がありました。空気の汚染度を調べたり、海水がきれいな地域にある海洋保護区を訪問し、砂浜のごみの量を記録したり、海の生き物を探したりする活動に参加しました。実際に自分の目と手で自然に触れながら学ぶことができ、とても楽しく、貴重な経験になりました。

私の通っていた学校には私のほかに2人の留学生がいて、学校が企画してくれたイタリア語レッスンや、自分たちの国についてプレゼンテーションをする機会もありました。少しずつ留学生内でもイタリア語で会話することが増え、イタリア語を学ぶモチベーションにつながりました。

私のホストファミリーは、ファザーとマザーと1匹の犬です。家は2階建てで、1階にはファザーが住んでいました。マザーは日本とパラグアイのハーフで、日本に3年ほど住んでいたため、日本語を少し話せました。誰も知らない土地に飛び込み不安でいっぱいだった心が少し楽になったのはマザーのおかげでした。ファミリーには子供がおらず、本当の娘のように私と接してくれ、受け入れてくれました。私のホストファミリーは旅行が大好きで、週末や休暇を利用して家族旅行によく連れて行ってくれました。ヴェネツィアやフィレンツェ、ローマなど、イタリア各地を訪れる機会に恵まれ、北から南まで様々な地域の文化や風景に触れることができました。特に美術館や歴史的建造物を実際に目にする体験は、教科書では得られない深い学びとなりました。またホストファミリーはとても社交的で、夕食を友人たちと一緒に楽しむことが日常の一部でした。

金曜日や週末には、友人を自宅に招いたり、みんなでレストランに出かけたりすることが多く、食卓を囲みながら様々な話題で盛り上がる時間は、私にとって貴重なイタリア語学習の場でもありました。

語学の習得については、私は「とにかく毎日イタリア語に触れること」を意識して過ごしていました。日常生活の中で目にした物や気になった言葉があればすぐにホストファミリーに尋ね、単語や表現をメモし、覚えた言葉を実際に使うように努めました。例えば、毎日手にする物の名前をイタリア語で言ってみたり、買い物のときに実際のやり取りを再現して練習したりするなど、生活そのものを学びの場にすることを心がけました。

私の留学生生活を強く支えてくれたのは友達や留学生です。人との出会いは、意識次第でどこにでもあると私は留学を通して実感しました。ただ待っているだけでは何も始まらないと思い、自分から積極的に行動することを心がけました。例えば、地域のスポーツクラブに参加してみたり、友人の紹介でその友達と交流する機会を広げてみると、自分にできる範囲から少しずつ交友関係を広げていきました。また、学校の休み時間にはあえてクラス外の人たちにも声をかけてみることで、新たな出会いが生まれることもありました。さらに、イタリア滞在中に訪れたスペイン旅行では、現地に留学している他国の学生たちとも交流することができ、異なるバックグラウンドを持つ同世代との対話は、自分の視野をさらに広げてくれる経験となりました。こうした出会いを通して、言語だけではなく、異文化に対する理解や柔軟な考え方も身についたように感じています。留学生生活をより豊かにしてくれたのは、間違いなく人とのつながりでした。この留学でイタリア語を話せるようになったことはもちろんのこと、言語を通して世界中の国から来た留学生の人たちと友達になることができました。私たちの母国語が日本語であるように各国の留学生にももちろん母国語があります。そのような中で全員が共通の言語を10か月間磨き続けたことで私たちは1つの言語で話せるようになりました。私が日本から離れた地で孤独を感じずに学び続けることができたのは、同じ目標に向かって日々楽しみながら成長をとともにできる仲間がいたからです。

今回の留学経験を通して、私は将来、イタリア語を使って留学生や日本に来た観光客などを助けられるような人になりたいと思いました。留学を決意する前まで、将来何になりたいか定まっておらず、何をしたいのかもわからなかった私にとってこの1年間の価値がどれほどのものだったのかを改めて感じています。奨学金を支給してくださった岐阜県の方々をはじめとし、家族、友達、私を心身ともに成長させてくれたイタリアの方々への感謝を常に忘れず心に留めておきたいと思います。